自由連合
Libera Federacio
No.38
1972年4月25日
姫路市力めの山354
自由連合社
振替 大阪1264
定価 一部 50円

？いま 何をやろうと？ しているのか

日常性との闘い

小川 信

―この文章をおわりまでよんだ君の感想が！、もし①バカげたヒマつぶし、⑪不道徳なあそび、⑪自慰的思趣味……などであって、しかもただそのまま読みながして何もしない、と言うのであったら、ぼくが今君に送ろうとしている社員としてのあいさつは取消そう。

ぼくは、この小論をいままでへ自連〉にかいた二十にちかいもののうち、もっとも重大なものとして、発表する。はじめからつなぐんだ、こんなことと読みすてられないために、主題をへそれ〉で表現した。へそれ〉の部分を、まずへ革命行動〉あるいはへ革命行為〉としてのそれ〉とあてはめて読み、最後に、本命のへ○○○〉（註1）〉と読みかえて、もう一度よんでほしい。ぼくはすこぶる真剣なのだ。

A へそれ〉の特性

① へそれ〉は、本来自分ひとりでは成り立たない。自分から相手へ働きを及ぼすへ伝達の行為〉からはじまるものである。そしてあらゆるところから起ってきたへそれ〉の大衆化によって、決定的なカとなる。（へ伝達性と相乗性〉

② へそれ〉は、きわめて日常的な身近雑事そのもののうちに見出されるものである。へそれ〉は、权力が与える秩序に対して、日々のいとなみに即した必要として、自分自身の秩序をつくりだすへ生活技術〉の発揮である。へ生活事務としてあらわれるへ庶民の才工〉の発現である。（へ日常性・生活性〉

③ へそれ〉は、ただそれだけで权力への反逆である。すくなくとも世間に報道されず、一般に知られただけで、权力の威信に大きくかかわりをもつ。（反权力性〉

④ しかも权力は、へそれ〉をとどめておくことができない。なぜなら、へそれ〉がぼくらの日常生活と不可分に密着したものであることによって、一にん伝達をうけたものは、自覚をするしないにかかわらず容易にへそれ〉の実践者たりうるからである。（一般性〉

⑤ へそれ〉は、具体的には日々に生起する、きわめて小さな一それひとつだけでは殆ど無意味にも思える微々たること、にすぎない。（微視性〉

だが、それゆえにこそ权力にとって、ほとんど一々対処しえない無数無慮の困難となるのである。そしてへそれ〉は、权力が設定した土俵で、权力側のルールによって闘うのではなく、ぼくらの土俵に敵を引込んで、こちらのルールで闘うことを意味している。（ゲリラ性〉

⑥ へそれ〉は、权力側の対応の困難さをうかびあがらせるにつけて、そのきわめて根底的な革命性を明らかにする。（革命性〉

しかも、そのことの微少さにもかかわらず、その質の重大さにおいて単に一国だけでなく全世界の权力国家を　させ　ゆるがす巨大な展望をもつ。（巨視性〉

⑦ このようにして、へそれ〉の及ぶ結果を―ぼくらの微視的日常が世界の国家群と対峙する―巨視的展望のなかでとらえるとき、へそれ〉は人民対国家の、もっとも直接的かつ明確な闘いとなる。（闘争性〉

しかもへそれ〉が非暴力であることによって、国家の最後のきめ手である暴力を、ほとんど無能力化する。（非暴力性〉

―このように書いていくと、論理はアジテーション化し、際限もなく発展して脱線！するおそれがある。

言うまでもなくへそれ〉ひとつで革命が完全に遂行されるような錯覚を与えるのが本文の趣旨ではない。へそれ〉ひとつから、さらに新しいへそれ〉が派生し、数十のへそれ〉に加わるへどネズミ〉状況などがあって、はじめて革命はようやく端緒につく。それはいまさら断るまでもないことだろう〉

（補足をかえて、あと二・三補足をつけ加えて、もうやめよう〉

⑧ へそれ〉は、权力によって定められた日常生活秩序に、自分の意志を附与することで、权力秩序の質を変えることである。（質的転換性〉

いいかえれば、抑圧され、見えないものであった人民の意志が、可視的なもの―反秩序として形をもつことである。（可視性と具象性〉

⑨ へそれ〉は、陳腐な労働を、真の労働―直接行動とするものである。へそれ〉は、あそびとしての労働であり、労働が本来もっているろこびやたのしみの復权である。（直接行動性〉

B その時きみは社員である

いまきみは、38号自連を受け取り、この小文をここまで読んできた。ここで、ぼくはきみに次の作業をとくに要請する。

1、38号住所の封筒、切手部分をきりとり、水に浸すこと。

2、そのまま水中で、切手スタンプ部分を軽くゆっくりこする。

3、封筒からはがれた切手をとり出して乾かす。

―以上のことをなし終ったとき、きみはそこにあらわれたものをみて、きさにA項のへそれ〉がはじまったことを知るだろう。

では、すぐ、きみは何をなさねばならないか―へ伝達と相乗〉において、君自身の内部から、その実践に取り立てられているものを確認せよ。

C 騒乱前夜祭幻想曲

このようにして、君がへそれ〉の実践に取り立てられるとき、しかし权力は、どう考えてみても、一指をも加えることができない。そしてほとんど対策がない。なぜなら、

Ⓐ へそれ〉はどのような法規に照しても、違法ではない。（へそれ〉は万一にもはがれるおそれを懸念し

Ⓑ 70年アンポが過ぎてそろそろ2年。アンポは様々な意味で大きな課題だった。いや、それだけだったかも知れない。

Ⓒ この2年は早く過ぎた。その間僕は何をしたのだろう、そして君は。

この補強策であるしという主張は、不審をかけるものを充分なっとくさせうる理由である。一体どこが悪いのか？

Ⓑ　対策を講ずる前提として、ともかくへそれ〉を発見しなければならない。ほとんど痕跡をのこさないへそれ〉を発見し、その他のものと区分する困難さは、さらに天文学的物量のひとつひとつを格闘する状況と相俟って、ふつうの方法では不可能と言いうるだろう。

たとえ機械化によるへそれ〉の選別機が開発されたとしても、新しい作業工程の附加がもたらす、資金と時間と労働の増加は、現状からして限度を超えた恐慌となるだろう。

しかも選別してどうするか。送り手に違法性なく、受け手はただ受動的でそれ以上の意志をもしかめえないとすれば、処罰対象は不在である。

Ⓒ　ではへそれ〉が再生産的に行われるのを防ぐためにどのような方法があるか。

㊀パンチ穴をあける。

㊁インクを改良し、浸透性をよくする

㊂スタンプと同時に、強く押圧して刻印的型をつける。

㊃切手を化学的なものとする。

いずれにしても、内容を損じないという条件のもとに、技術的、資金的に容易ならぬ大問題である。

しかも、その対策を一せいに実施するとなると、相当の経過時間を黙認しなければならない。

これらのことが明らかになるにつけ、へそれ〉はいよいよ拡大し、一般化するであろう。それは政府の混乱と狼狽、財政の悪化に一層拍車をかけつつ、日本だけではなく、世界的規模の問題となる。

かくしてこの混乱をしずめるのは人民が主導した秩序以外にないであろう。

差しって政府へ要求し、実施させることは

㈠　営利を目的としない個人の郵便物はすべて無料

㈡　判定のむずかしいものは人民の委員会による区分

㈢　その他の郵便物は、すべて局へ持込んで、料金を支払う。

㈣違反を発見した時の委員会による審判と処罰。

である。

このようにして、それは他の政府専官の諸事業、たとえば交通等に及ぶこととなる。〉

しかしまに政府にとって、それは人民への全面屈服であり、威信の喪失である以上容易に承服しがたいものにちがいない。かくして革命的騒乱を政府は自らつくり出さざるをえない窮地におちいることになる。へホンマカイナ〉へホンマカドウケ、ソンナコトオマエノヤルコトヤ〉

D　へ日常性〉との闘い

さて、いま現在の問題にもどろう。かくして、№号の自連発送は、自連発行の風景を、ひとときー変させるものとなった。

事務所内のあらゆる空間は、封筒がひろげられ、足のふみ場を失った。そしてその封筒にはられた切手の上に、文具屋で買ったノリが、ひとつひとつぬられたのである。

何のために？　もはや言うまでもないだろう。へ革命への出発のために〉である。

へおお、何というカッコさ！これこそ日頃、オイラが待ちのぞんでいたセリフではないか！〉

だが、その言葉だけのカッコさに反して、ノリをぬり、その乾きをきっ作業の、何というミミッチさ、きびるっこさは、どう受取るべきか。

それは、日頃へ革命〉を語るときにいにくく、精神の昂揚や、ときめいた心のふるえの、片りんもない。そして「何かをやった」というせめての充足感すら起らない。

にだあるのは、日頃の想いとしてのへ革命〉とはおよそ程遠い尋常さ、ありきたりさ、日常性のイヤというほどの、やりきれなさばかりである。

アホらしくて、こんなシンドイことデケン。

きだ、ちょっとでも金もうけになるんやったらマシやけど…

相手が黙殺したらそれっきりや。へーここでぼくはA項にもうひとつつけ加える必要を感じる――〉

⑨　へそれ〉は、ただちに自分へと利益を与えるものではない。

切手は、貨幣の金額で表示された有価証券ではあるが、へ手紙を運びとどけるという労働の量、あるいはエネルギーを表示した契約の符号〉であって、本来、金銭に換価できるものではない。

だから、へそれ〉はへ無償の行為〉である。一見経済行為にみえていても、またそれを金もうけとして画策しても、本質的にへ非金銭的〉へ非資本主義的〉であるゆえに、その私所有や蓄積は、資本化できない。

そして、そのことをはじめから意識することにおいて、へそれ〉はへそれ〉となるのであり、人民対国家の闘いに向うのである。

ふつう、資本主義社会のなかで、へ金もウケにならぬ〉へ無償の行為〉をつづけることはへバカ〉かへ気狂い〉か、片一方でボロもうけしている人間のカモフラージュ以外にはありえない。とすればありきたりの人間にとって、まさにそのことばへシンドクて、その闘いの長さがへ耐えがたい〉のも当り前だ。

それは、前号にかいた次の文章とまさに相似するものである。

「……それにしてもほとんど大海の水を汲むような一例えば兵士ひとりひとりを変えていく闘争の、さらにその支援といったーこの問題さ、迂遠さ、しかも一つずつ改めるしかない現実のなかの闘いのちっぽけさ日常性はーあの統一赤軍の、革命にすぐ短絡しているかのような銃撃戦のはなばなしさ、勇ましさと、まったく対照的である……」

いまそれにつけ加えて、前者のへ日常として殆どなんでもなく、長くたえきなくつづくもの〉に耐えしのぶことのつらさ、重さこそが、実は闘いそのものであるとしたとき、それは決して銃撃戦の勇ましさ、激しさに勝るとも、劣るものではない。

そしてへそれ〉とは実に、その日常性との闘いにほかならぬことに気付かねばならない。

×　×　×

へ註1〉は、へ切手の上にノリをぬること〉である

「社員募集」

自連特別号の申し込みを？

自連特別号＝ミニコミ特集の頒づしもほぼそろいましたので、5月25日付発行と決りました。

厚さ＝郵送料や限定五〇〇部程度〉

へ但シ、一般　布は三〇〇部程度〉ということもあって、申し込み制にします。お早く？

。定価　一〇〇円（但シ切手で）二円

。申し込み〆切り　5月末日

。自由連合下阪近代金を添えて。

標的を射つ・玉川信明（3）

自立共同体を望む…？

＝文革は何であったのか＝

尾関弘

問題の解決には、一にも二にも学習。最終的には毛語録。毛語録は方法論を示しているだけだから、何にでも使えるわけですよね。毛沢東は爆発寸前までもっていき引き戻すというスタイルをとりつつ、少しずつ進んでゆく。ただ、進んでゆく方向がぼくらには少し納得ができないということですよね。　―玉川

カッコ付きの自立

尾関　イスラエルにはキブツ連合というのがあって、いわゆる共同体間の政治と経済の場になっているそうです。共同体というのは、内に向っては共同体であるのが、外に向った時、共同体自体が一つの国家になったり、あるいはより大きな単位である共同体に吸収されてしまうものです。だから、国家を脅せるかどうかは、共同体連合の存立がいかにあるかにかかっていると思います。ところで、人民公社の横のつながりというのはどうなっているのでしょうか。

玉川　中国では、自立共同体ができること自体は望んでいますが、人民公社連合ができるのを恐れています。その現実的で最大の理由は、戦争の問題です。

尾関　どういうことですか？

玉川　中国にとって戦争というのは非常に身近な問題であって、今も常時、臨戦体制下にあるといっても差しつかえないでしょう。「自立共同体を望む」というのは、中央権力の指揮下に全てをおけば、その中央権力がつぶされたら全てつぶされることになりますが、自立共同体であれば一つ一つつぶしてゆかなければならないということです。

尾関　人民公社と政府の関係は具体的にはどうなっているのでしょうか。

玉川　人民公社でも「政府に頼らないように……」というのをスローガンにしています。人民公社連合ができて政府が不必要になれば政府は困るわけですから、当然そういうのは認めないし、作ろうともしませんね。だから「自立」といってもカッコ付きなんです。「敵の正規軍には正規軍で戦わねばならない。ゲリラではダメだ」という鉄則が貫かれていますから。

運動による強制

玉川　ある労働者団地で人民の組織の仕方を尋ねたんです。まず下放されてやってくる兵士がいますね、彼らが人民を日常生活のレヴェルで抑圧していることはいうまでもありませんが、その他に、「地方自治保安委員会」というのがあって、これが警察機構の役割を果たしているようです。いわゆる警察官は、交通整理だけをしているみたいです。しかし実際は、公安が街の隅々に無数に隠れていると考えて良いようです。とにかく、「密告することは良いことだ」とか「反革命分子を摘発せよ」とかの鳴物入りで、人民の名においてやるんですから誰も信用できなくなりますよね。人間不信というか……。

尾関　裁判制度はどうなっているんですか。

玉川　中国はよくも悪くも法治国ではありません。刑法ですらはっきりしていないようです。「無法」というのは理想ですが、それだけでは上も下も自由に悪いことができる。それを今の中国ではどうしているかというと、「運動による強制」で解決しようとしているわけです。だから中国では、常時、運動を起こしていないと秩序が保たれないのです。一つの運動がたえると、次の運動を準備しているというように……。

尾関　民法に関るようなこと、たとえば嫁と姑の問題なんかは、どのように処理されるのですか。

玉川　中国では「四世同道」――歴史的共同体が温存されており、日本でいう核家族は批判されている。何故かということを聞けば、「とにかくよりに学ぶのはいいことだ」というのがあるんですよ、中国には……。

較差への危惧

尾関　話をもとに戻しますが、人民公社間の較差はどうして解決されているのでしょうか。国家が介入するということになりませんか。

玉川　反収量はだいたい一定しているので、増産率は一反あたりにつぎこむ人数による。それも、これこれの反収量をあげるには、五人なら五人というのが決ってくる。したがって、農村間の較差は――都市に比べてひどいんですが――機械化の有無にかかっていると思います。文革のもった一つの性格に、その較差への危惧感があったことは確かです。

北京市の北の人民公社を見聞したところでは、栄養状態は中の下、あるいは下の上ぐらいに思いました。子供の痴なんかもやせてコケコケでした。

尾関　相対的な問題として、文革前と比較して良くなっているということは言えませんか。

玉川　そう。富豪と路上の餓死者がいなくなったかわりに、七億総貧民になったと言えるでしょう。中国の都市で――それも上海とか北京とか一部に限られていますが――日本の普通の農村と同じ経済水準じゃないでしょうか。

文革は革命か

尾関　人民公社は、政経両面の一つの単位である点に特徴があるように思います。、具体的なことがらが何か起れば、政治的理由が経済的理由に優先するのでしょうね。

玉川　政治的強権の下での自由は、しばしば衆愚政治よりましな場合があります。その意味では、中国にとって大きな権力は、一種の必要悪かも知れません。中央権力を排して、人民公社が完全な自立共同体になった時、中国は危機に直面するでしょう。

尾関　その中央権力と末端政治を直結させているのが「党」だと思うんですが、たとえば党員は、人民公社においてどのような地位にありますか。

玉川　文革は、党官僚に対する革命であったともいわれています。党組織は事実上破壊されてしまい、党は軍に吸収解消されたともいわれています。官僚主義の打破という側面では多いに評価するのですが、紅衛兵がさらに左傾化し、たとえばイギリス大使館が焼き打ちされたりすると、極左主義は反革命だということになる。毛沢東はこのように、紅衛兵のヒモをゆるめたり、引っぱったりを自由自在にしているという感がしますね。

尾関　あれだけのエネルギーをついやして行われた　（10頁下段へ）

〈流砂の対話〉

市民・釜ケ崎・詩・地球……

寺島珠雄

——前の号の自連を読んだけど、小川信というひとが16項目にわけて問題を出していたうちの12番目についてききたい。

——ききたい、と言われても俺は小川信じゃないぜ。俺は俺として考えていることはあるが……

——勿論、それでいいんだよ。ところで本題。小川信が書いている「市民ということばが、たとえば、人民、庶民、大衆とよぶそれとどうちがうか」を、お前の考えで言ってみてくれ。

——そうさなあ、市民というのはきだバタくさい感じで、元をただすねたらいろいろうるさいこともあるぞろう。しかし、いき俺達が目にしたり耳にしたりする市民ということばの内容は、モノを作ってない人間だな。

——フン、説明してくれよ、もう少し。

——つまりさ、俺達は土方として爲として道路やビルや個人の住宅を作ってる。百姓は米や野菜を作る。漁師はまあ作りやしないが魚をとる。工員はめいめいの工場のモノを作る。大工、左官、ペンキ屋、畳屋なんて職人もめいめいにモノを作る。作るというのとはちがうが、列車の運転士やトラックの運転手や、士ときのちがいは知らないがこういう職業もそのなかに入れる。まあそんなの以外に市民てェのがいるんじゃないか。

——するといわゆるサラリーマンかい？　銀行員とか役人とか事務員とか……

——教員や医者や或る種の商人や……

——大分わかってきたよ。文化人とか知識人とかっての近いってわけだろ？

——そういうことになりそうだな。しかしそれで結局なにを言いたいのか、こんどはこっちがきこうじゃないか。

——いや別に言いたいことはない。ただ不思議なんだよな。こちとらがクのない者のカンではさ、職ってのは君あってのものじゃねえかって思うわけ。君の代りに、政府としてもいいけど、とにかく、そんなんなら臣民でも国民でもなんでも人民でも市民でもおんなじことになりやしないのかなあ。

——ぜクなしの堂説、もっとしゃべれ。

——もうネタ切れだ。にだな、市民てえことばきくたびにぞっとしてたのを、お前に言われて当り前だと思いあたったよ。

——そいつはどういうこと？　やっぱりきだそっちのしゃべる番なんだぜ。

——俺達、町屋仕事に行くことがあるだろ？　マイホームの建築なんかさ。そんなとき大体こん畜生って思わせるような施主はお前の並べた市民の連中だよな。

——そう言やそうだ。文句が多くてケチくさくて、き、そんなんばいいとしても、どことなくひとを見くだした目付でな。特にオンナがそうだ。

——うん、ちょっと待ってくれ。切り抜きが一つしきってある。……ほら、これ。

（71・8・29読売新聞朝刊「気流」岡山県の土建労務者Kさん49歳の投稿から以下を抄出）

バスで帰宅中、三十歳前後で、サラリーマンの奥さん風の母親が六、七歳ぐらいの男の子と一緒に前の座席にいた。道路では、歩道を作るため労務者がヘルメットをかぶり、スコップを持って、炎天下に汗を流していた。子供が「ママ、あの人たち何をしているの」とたずねた。「あの人たちは小さい時にパパやママの言うことを聞かず、勉強しなかったからみんなが遊ぶ時でも暑い所で仕事をしているのよ」なんという言葉だろう。私も土建労務者だが、私の子供は、親の仕事を誇りにきで思っていないが、恥ずかしいとは思っていない。

——どう思う？　こんなの。

——よくあるやつさ。投稿の趣旨は正しくて言うことなしだけどね。

——腹あ立てないのかい、こちとら腹が立ったんでしきっといたのに……

——腹は立つと言えば立つ。しかし考えてみろよ、外国ではどうなってるのか俺は知らないが、ソ連にもアメリカにもフランスにもやっぱり土方もいる。清掃人夫もいる、屠殺屋もいる筈で、その職業は決して尊重されちゃいないと思うんだな。サラリーマンみたいなものと平等にみられてはいないだろうさ。

——お前の言うことはミもフタもない。それじゃアキラメ主義か？

——いやアキラメ主義じゃないが……俺も一つ見せるものがある。三年ばかり前に俺がちっちゃな詩集を作ったとき、にくさんもらった手紙のなかにこういうのがあった。

（以下、女詩人Kの手紙の一部）

M氏が、民衆に、抑圧された民衆の言葉を回復させる運動を、といっておられるのですが、そのことをずっと考え続けていきます。底辺に文学なぞが必要なのか、必要とされているのか、疑問に思います。文学は毒であることで、そのことで存在があると考えています。

——この手紙がどうだって？

——なあに、反体制とかいうインテリセンチメンタリストは、実によけいな心配ばかりするという見本だと思ってね。

——しかしお前もこのごろは詩人なんて呼ばれてるじゃないか。

——そりゃ別にかまわないよ。詩を書いたら詩人、足場を組んでりゃトビ、穴を掘ってりゃ土方、なんでも結構ってもんだ。いいことをきかしてやる。「僕は、時に役者となり、時に寄席芸人となり、時に浮浪人となり、時に食客となり、時に飜訳業者となり、時に小説を書き、時に職工となり、時に……」となることがあるでありましょう。僕はただ自分の自我の趣くままに生きて行くのみでありますし」というこの文句、どうだい？

——ようく覚えてやがら、何だそれは？

——ツジ・ジュンというおっさんの書いたことだよ。そっちのきらいな市民には、なる資格十分で拒否し通して死んだ。

——その話に戻るとしよう。お前もてんで市民なんてガラじゃないのに、結構市民らしい連中とつきあってるのはどういうわけか、一度きいとく必要がある。

——たしかに俺のつきあいのなかには大体のところ普通の市民で通る者もいる。けれどさ、その連中だって普通ばかりではやっていけないものが躰のなかにあるんださ。俺はそ

の部分とつきあってるだけだ。何うが俺から受けとってるのは多分一種の自慰だろう。こっちはこっちで相手次第にそれぞれ得るところ認めるところがある。無言のバーター貿易かな。

——あるやつがお前のことをアナキストだって言ってたけど、それはどうなんだ。

——俺は自分で名乗ったことはないよ。しかし言うやつに一々訂正して廻ることはできやしないし、世の中は分類好きだから、強いてわけりゃそうともなるのかなあ。

——もうひとこと言わせるぞ。結局お前は何を考えてるんだ？何が理想なんだ？

——理想はない。空想はある。それはもうずっと前からだが、人間全体、百年ほど絶対に子供をつくらない仕掛けになるきいかということだ。百年すぎたら、きず地球は静かになるだろう。鳥や獣や虫や魚がゆったりと生きてるかそれもなくなるか、とにかく、そっくり廃墟の地球ってのを、俺は空想のなかで考えてる。

——深沢七郎の人間滅亡教と同じか？

——深沢のは知らない。それにあとときは問題にならない。俺がこの空想にとっつかれて二十年近いけど、どうやら自分の子供を作らずにすぎてきた。けれどきにこんな空想の半面では、早港湾の西成分署は、たとえば昼食付きの現場の、釜ヶ崎の求人のほとんどほそれなんだから、その弁当現物の持ち寄り調査みたいなことをすりゃいいのになんて現実的なことも考えるんだな。筋肉労働に見合う栄養とカロリーを含んで昼食付きかどうか。

——そいつはいい考えだ。実際ひどいところがあるからな。塩味もない小さなにぎりめし三個に、長いままのチクワ一本とタクアン一切れがおきまりのところはお前も知ってるさな？　弁当箱でもめしの上にべちゃっとサバの煮たのなんかのせて、臭くて食えないのもある。去年の夏、或る組の弁当じゃおかずにウジが這ってた。お前はそういう建設的な考えをどうして組合に言わないんだ。組合費は払ってるんだろ？

——二ヶ月払ってやめた。

——なぜ？

——手配師取りしきれ、人夫出し飯場取りしきれ、というのがどうもな……俺は取りしきられるのも取りしきるのもイヤだから。手配師や人夫出し飯場の存在は建設業の構造上の問題なのにということもある。

——きたわからなくなってきた。ではピンハネ賛成かとなりゃそうじゃないだろう？

——たとえばさ、組合対どこかの元請業者との協定で、その業者あるいは一現場の労働者の紹介を組合が行なうというモデルケースを作って拡大して行くことはとても考えられないだろうか。手配師、人夫出しの違法取りしきりを叫ぶより、現行法の認めている労働組合の事業として労働者紹介をやる方が実質的じゃないか。その場合の必要経費をかりにやっぱりピンハネで賄うとしても、いきなりきんにはなる筈だ。これは単なるアイデアで、俺ならやってみせるって意味じゃない。俺は自分のその日の現場で条件が気に入らなけりゃその日のなかきと一緒に交渉してちっとでも良くするが、それはその日限り、団結の恒常化なんて考えない。非常にたくさんそういうことがくり返されて、条件向上が定着しその日その日のなかまだっに顔見知りが釜ヶ崎中にふえて行くことは考えられるけど……

——具体的なことを言ったかと思うとたちまちいい加減になるんで、どうもホンネがつかまえにくいな。

——ぜーんぶホンネだる。但、永久保証ではない。永久保証するには俺も人間が塩っぱくなりすぎたよ。

——そう言やあ、会ったり見えなくなったり、もうっさあいは六、七年か。お前の頭はもともとシラがきじりだったが、でもふえてるなあ。

——人並に、苦労が多いとしておくか。ところで、そっちはメーデーに行くのかい？　行くんだろうな。最近みつけたメーデーの詩を教えてやるよ。作者は不明だけど……

（以下昭和六年五月「弾道」第二巻第一号の無署名の詩「街頭の行列へ」の全文　——本ページ別ワクへ——）

——うん、この詩の言いたいことはよくわかる。何年か前、山谷の山自労のメーデー反省会に行きあわせたっけが、そこでもフンワカメーデーは批判されてた。日雇労働者が日当をなげうって参加してみて何になるのかという論議だった。参加自体に意味があるというオリンピック式もなかにはいたけど。しかし、どうもうまくはぐらかされた感じがあるなあ。もっとざっくり向い話めたかったのにな。で、話はちがうけど、自連の小川信ていうの、あれはだれの筆名？

——さあねえ、そんなことは気にしなくていいだろ。筆名はたしかに筆名で、どうも甚だセンチな由来があるらしいんだが。

——そうか。じゃまたいつか会おう。

——うまくやれよ。

腕を組み合わせている
数万の足どりと響かせている
数百流の旗が動いてゆく
「守れメーデー労働者」
君等の声はつかれ、弱り、顔は汚れ、而も隊伍のみ整然と動いてゆく
四人づつ、四人づつ
コンクリートの道の上を
こんなにも神妙に上品に歩いて行って
都市の小ブルジョアに何を見せようというのか
永き搾取の悩みから蹶起した無産の民
君等がそれであるだろうか
行列の先頭に翻る組合の旗
君等に掲げられたそれが自由の旗であり得るか
メーデーとは一日を費して労働者の温順と恭順を示す時か
宮权(ママ)に守られて歩く数万の人波がかつて我等の為に何を示したか
さらば街頭の示威者諸君に贈るひとこと、
「メーデーを抹殺せよ」
この一言を君等一つの口から一度づつ叫べ
そこにおこる宮权の狼狽と周章の中に
メーデーは正しき姿を現出するであろう

自連への発言（1）

マスコミとその自連

滝理

1.

'69年の夏から秋にかけて、『自連』の編集に加わっていたとき以後、あまりよくない読者へ投稿は一度もしなかった！）として二年以上たった。そのあいだに、ぼくのやってきたことは、今の『自連』のあり方と全く無関係だと思っていない。

'69年の夏にハンパクがあった。そのときある集団から、自連社に対する批判があった。自連社が単なるもの書き集団で、行動をともなわない、というのである。この批判に対する答は、自連社は新聞社だ、ということだった。

新聞を出すということは、いうまでもなく、それ自体でひとつの大切な行動に違いない。けれども、読者が限られていようが、新聞を出すことがどんなに大変な労働であろうが、新聞としての『自連』は、どうしてもマスコミとしての性格を背負わねばならず、そしてマスコミには、内報や手紙のみに許される何かが宿命的に欠落するのだ。

内報や手紙にある本質的な何かとは、それを出すことが、それを出す人間の行動に従属しているということだ。つまり、それを出すことの中に、その目的をもつのではないということだ。手紙を出すときに、いちいちそれを出すことの意義を考える人はいない。『自連』が、その意義を考えたりしなければならないのは、それを出すことの中に目的を見い出そうとするからだ。

2.

ものを書くということはどういうことなのか？　そして、書いたものを読んでもらうというのはどういうことなのか？　ぼくが『自連』の編集から抜けて、同人誌『ステインプル』を始めたのは、自己の思想を文章化してゆく場として、その方が適当だと考えたからだ。つまり、ぼくにとっては、文章の上で思想を構築してゆくことの方が目的で、同人誌を出すことをそれに従属させたかったのだ。『ステインプル』は、去年の7月に5号を出したまま、6号をまだ出していない。この紙面を借りて釈明すれば、要するに、同人誌を出すということにさえ拘束されたくないということだ。むろん出さないわけではない。ちょうど4号を出したころから、ぼくにはある大論文の構想ができて、大体の輪郭を考えるのに半年、去年の10月から書き始めて、やっと序章を書き終えるところだ。出すことのためにいいかげんなものを書くよりは、出さないほうがいいにきまっている。

3

'70年の4月から東京に来て、ある出版社に勤めている。その出版社は、かなり固定されてはいるが、非常に数少ない読者しかもっていない。要するに売れない本ばかり出している。そこでは、一冊一冊の出版について、企画の段階から、その本を出すことの意義が大きく問題にされる。

どうしても気になるのは、実際に文章を書いた著者と、それを本にする出版社との関係だ。本を出すのは一体誰なのか？　厳密にいえば、著者は本を書くだけで、出すのではない。出すのは出版社なのだ。少なくとも、出版社としては、本を出すことにこそ、自己の領分を求めざるをえない。そして、自己の領分というものを擁保してはじめて、大きな顔をして仕事が出来るのだ。それは、企業だろうが、セクトだろうが、本質的に同じはずで、『自連』もまたその例外ではありえない。

4

本（新聞）を出すこと以外の行動を他にもたず、自分で書くこともしない編集者には、編集者としての自己主張がある。それは、つまり、どういうものを、どういう形で本にして出すかということだ。

企業としての出版社（新聞社）が、売れるもの無来しても、ただ売れるというものは存在しない。売れるというのは、販売力を別にすれば、よく読まれるからだし、よく読まれるためには、その本にそれだけの内容がなくてはならない。

また、売るための目的、たとえば、コストダウンや、原料を製品にするまでの時間を短縮するという目的のために、品質が落ちるというような結果になるとすれば、企業の中にいる者にこそ、その責任が求められねばならない。

マスコミが一般に信用できないのは、国家との癒着がおこるからだ。確かに、どこかで妥協しないと、どんな企業も成り立たないような、政治的、経済的拘束がある。しかし、そのような抑圧と闘うのもまた、企業の中にいる者の責任であるはずだ。

5

自連社は企業ではない。しかし、それは『自連』の売り上げではメシが食えないという理由で、企業としては成り立たないだけだ。『自連』をメシの種にするということが、ちょっとでもいけないことだというような考えがあるとすれば、そんな人間は、カスミを食って生きていくほかない。『自連』でメシが食えれば、チシソで働くより幸福なことだ。

自連社が新聞社である限り、そして、『自連』の新聞としての質を高度に保持するために、編集者には、それでメシを食うだけのプロフェッショナルの精神と、責任が必要なのだ。

編集者のメシのために、『自連』の定価が今の5倍になっても、読者としてのぼくは構わないと思う。月刊もので二五〇円というのは決して高くはない。それよりも紙代というのは、新聞に対して支払うのではなく、発行者に対して支払うものだと、ぼくは思っている。むろん、それで編集者を満腹にしてやろうとは思わない。金を払う方も決して満腹ではないのだから。

企業では、入社即日からプロであることが要求される。今の自連社は知らない。しかし、ぼくがいた時は、そんな厳しさがなかったように思う。ぼくがいたころ、自連社では、「自立」と「土着」という言葉がはやった。発言するという行為もまた、それなしには価値をもたない。そして、そのことは、少なくとも「持続する」ということを前提にしているはずだ。一回の発言は、そのことを永久に発言し続ける責任をともなうのだ。

〈自連翻訳双書IV〉
アナキズムと革命戦争
■特価　二百円（二十共）
申し込みは自由連合大阪まで

手書き文字の可能性

塾の思想と独習の思想

花田映子

高野悦子と奥浩平

『青春の墓標』は奥浩平が一九六五年三月、二一才で服毒自殺するまでの遺稿集であり、『二十歳の原点』は高野悦子が一九六九年六月、二〇才で鉄道自殺するまでの遺稿集である。

彼等がそれぞれ読書したと記している書を比較してみよう。二人に共通しているのは、小説と歴史書とパルタイ自主出版パンフレットのみである。奥の読んだ社会科学書はほとんどマルクス著作集と限定し得るが、高野のそれは、マルクス著作集としては入門的な書一冊のみである。

つまり高野は、マルクスなんて関係ない学園斗争を担った全共斗世代の一人であり、奥は当時一六のの安保世代という訳だ。

全共斗、ノンセクト・ラディカルは人生論で斗争している――かって学園斗争の際中に、彼等は安保世代やパルタイからこう批難されたものであった。確かに全共斗、ノンセクト・ラディカルは、彼らの日記・書簡の一句・一節をそっくりそのまま、アジビラとして使用したこともある。けれども全共斗世代は、安保世代やパルタイから一線を画し得るような意味を、はたしてどこに見い出したか。

遺稿集『青春の墓標』は日記と書簡とからなり成り、遺稿集『二十歳の原点』は日記から成り立っている。しかし安保世代の奥は一冊の日記帳、一巻の書簡集には、そして全共斗世代の高野は一冊の日記帳には価値を求め得なかった。

自己否定論の終焉

学園斗争が全盛なりし頃は、帝大解体・自己否定をアジった学園斗争ビラ集がベストセラーになり、書店には学生運動コーナーが設けられたほどであった。しかし、今ではそのコーナーも消失し、古本屋に学園斗争ビラ集を売りに行っても、「お客さん、相当遅れてますねえ」と言われて、逆にねぎられてしまう。

そして日本共産党中央委員会理論政治誌である『前衛』へ72・4月号特集「青年の問題」では、『二十歳の原点』の心情に不可避的な"狂気と絶望"への文脈の推移にわずかに述べている箇所のみ、しかし次のように述べている箇所の範囲内にたいては、全共斗世代の自己否定は確かに終焉していたのである。

彼女がその「自己否定」論のいけにえになることによって、つまり、"生きること"への「自己否定」とともに、"働くこと"への「自己肯定」の不可避的な「否定」によって、いいかえれば、彼女を死に追いやることによってのみ、トロツキスト・「全共斗」一派の「自己否定」論は完結したのである。

学生存在、大学生存在の自己否定があれほど叫ばれたにもかかわらず、学園斗争ビラ集がベストセラーになった時ですら、アジビラ・コミュニケーションする立場の方が問われることはなかった。その故にこそ、学園斗争が敗北した現在、学園斗争ビラ集が古本屋にとってさえも無意味無価値な存在と化しているのである。山本義隆が言うように、学園斗争ビラ集は実践的に乗り越えられた、という訳では決してなく、日記・書簡の意味が今こそ問われねばならない。

手書き文字の意味

日記・書簡は、一体何故手書き文字によって書かれるのか。集団によって自主発行されるアジビラは、一体何故活字による印刷されるのか。そしてマスメディアによって発行される書は、一体何故活字によって印刷されるのか。

同義の意味を所有しているとしても、手書き文字、かり版印刷、活字と行くに従って、特殊な閉鎖性を失い、一般的な公開性・共同性を強く帯びてしまう。例えば、表現の交通量が増大するに従って、それに対する交通費の割合が減少するという具合に。

マスメディアによって発行される書は、一般的な商品価値を先験性として所有し得るが故に、活字によって一般に公開、共同されねばならない。一般的な商品価値を所有し得ないような閉鎖性を伴う日記、書簡、そして集団によって自主発行されるアジビラは、そこから排除される傾向にある。

例えば一冊の教科書。これもまた、一般的な商品価値を付与されに公開性・共同性を所有している。そして学園斗争とは、その一冊の教科書さえも、一冊の学園斗争ビラ集の方に、さらに一冊の日記帳、一巻の書簡集の方により価値を求める斗争ではなかったか。つまり全共斗、ノンセクト・ラディカルは、新たなる未知の公開性・共同性のために、一般的ではない特殊な閉鎖性に伴う交通費を選択して来たはずなのである。

換言するならば、学園斗争とは、大学の授業とパルタイの学習会とを貫徹している学校の思想を、塾の思想で、そしてさらに独習で反論して行くものであったし、一冊の教科書を成立せしめている活字に対する、手書き文字の反乱でもあった。

学校の思想とは、マスコミ文化人、大学知識人、学生活動家が象徴するように、活字の書にきず価値ありとする態度であって、それは書くことの意味を抜かした活字の書信仰にきず永生する。そしてこれが不毛な論争と、論争の不毛な循環とを支えているのである。

塾の可能性

塾の思想とは、古来より寺小屋、塾が塾生の作業として来た日本にきず価値ありとする態度である。つまりこの塾の思想が、書くことの意味を抜かしに書の方向に自立し、近代化・商品化されて行ったのが学校の思想であって、書くことの方向に自立して行ったのが独習の思想である。

独習の思想とは手書き文字にきず価値ありとする態度であって、それを体得するものとして、一冊の日記帳・一篇の書簡集がある。つまり独習の思想とは、内村剛介のように、言葉・言葉だけによって書くことであり、或いは林静一のように、書くことだけ、書くことだけ、書くことだけと書くことだけである。

学園斗争は敗北し、全共斗運動は解体し、新たなる未知の公開性・共同性は破産してしまった。それはつまり、斗争し得るような人生論を全共斗はノンセクト・ラディカルは終に所有し得なかったということであり、一冊の日記帳、一巻の書簡集から、新たなるWPSTへ(つづく)

思い込みによる組織

連合赤軍のリンチに見る

北邦彦

先日、以前の牧場建設へ途中ズッコケ（）グループの仲間の一人と連合赤軍の件について話していて、二人が強い実感として確めあったことがある。それは、赤軍が内部崩壊していくプロセスは、ぼく達の場合と非常によく似ているんではないか、ということだった。

強制される主体性

ぼく達の場合をもう一度振返ってみると、運動を実際やる場合にも共に生活する場合にも、個人の主体性が最も大切なものとされ、その主体性というものは、他者へのいたわり、優しさといったものは、他者を本当に尊重するものではない、という考え方によって意識的に排除されるというような性質のものだった。それは、日常の様々な具体的な問題についてお互いが点検し、主体性を欠いている者に対しては、かなり徹底してその非を追求することになる。他者に対して厳格であることが自己に対して厳格であることの証しであり、それのできる者が主体的な人間であるという考えにもとずくからである。だから、みんなから主体性を欠いていると見られた者は、四六時中みんなの監視の下にあるようなもので、そのことがその人間をより陰うつに卑屈にする。

精神的に追いつめられ、耐えされず組織を去る者には、脱落者、裏切者として容赦のない切り捨てが行われる。その際、それに内部から異論を出すことはそれまでの組織論そのものと対立せざるを得ず、それに対しては組織擁護の側から異論を出した者の主体性を問うという切り返しが行われ、ほとんどの場合そういった声はかき消されてしまう。結局、少数者の積極的な切り捨て行為と多数の者の黙殺となって、それは完了する。

明日は我身か

その時の成員の心境は複雑で、切りすてられた者の位置に近いものは、不安にさいなまれながらも、しかし、自分でなくてよかったと安堵の胸をなでおろす。そこから遠くにて、明日は我が身かと案じる必要のない者は、これで組織のガンがなくなり、組織的結集力が強まるだろうと期待するとともに、主体的である自己の切れ味の鋭さに内心満足する。従って、自分より先に脱落するであろう者が多くいればいる程、その刃は鋭さをまし、少くなればそれに比して鈍くなり、そのぶん不安感が増大する。だから、その組織の実情は次のようにいえる。常に組織の頂点にいる者以外は、多かれ少なかれ、脱落者の汚名をきせられる危険を感じながら、自分だけは落ちまいと必死に主体的たろうと努めていた、と。

赤軍の場合もほとんど同様だったろう。そしてその政治の力学はぼく達とは比べものにならない程強力に各個人に作用しつづけたことだろう。脱落することは死を意味したにんだから。

結局、政治革命をいいながら、内部では出発からその政治に敗れていたといえる。その組織的破局を救う道は、立ちどまって内部の政治を疑視し、その組織構造にメスをいれることしかなかった。ところが彼らはより突っ走った行動をすることで、そしてその過程でおちこぼれていく者を無慈悲に切り捨てることで、組織をかためようとした。次々と暗殺していかねばならなかったのは、この組織の、この政治の途を進む限り、必然的である。

思い込みのドグマ化

先日の新聞に永田洋子の面会に両親が二度ばかり行き、二万円の差し入れをしたと書いてあった。同じ所に、何をしていても親とは関係ない、という永田の談話ものっていた。

これは示唆的である。赤軍の組織の結集軸が、実際は関係は疑いもなくあるのに、関係はない、と言いきってしまうにんなるへ思い込みヽでしかないことをよく物語っている。

ぼく達の場合も、岡田米雄氏はよく、自分は天涯孤独だ、君達も親との関係をきれ、でなくてはこの事業はできない、と言ったものだ。そこからその組織論や運動論がうまれる。つまり、〇〇しかない、という唯一者意識の発現として。と同時に、現実の中で確かな変革の道をつかめていないという焦りと、自己を一孤にふっきれに革命者の位置へおしあげたいという気持を、少なからずもっている者達が、唯一者意識を持っている個人のへ思い込みヽをドグマ化してしまう。必然性に根ざしていないようなにんなる思い込みによってうまれに運動や組織は、傍目には大きく水ものであっても、早晩、内部から自壊していくより道はない。

おそらく、ぼく達の場合と同様、新たな運動や組織の出発は、この事件にこだわり最後の血の一滴まで見つづけることからしかはじまらないだろう。マスコミや赤旗の馬鹿騒ぎの中で自己に向いつづけることは苦しいけれど、確かな出発のためには避けては通れない。（垢より）

（WPより）未知の公開性・共同性を変革して行くためには、その公開・共同制度の内からではなく、結局、あくまでも特殊な閉鎖性からそれを導き出して来るより他にない。従って、マスコミに対するミニコミではなくて、活字の書空間に対する手書き文字の書空間の意味を問い直して行くことにしか、新たなる未知の公開性・共同性の可能性はもはや存在していない。

大学＝人買いにではなくして、塾＝人飼いに秘められる新たなる可能性は、唯々今書く行為の意味にのみ賭けられている。

広告

海賊版
現代暴力論ノート
定価二五〇円　〒八五円
あと二五部で売切れデス
申し込み先・松江市北堀町
九二　古賀義夫宛
向井孝著

★ヘサルートンヽだより
新入り大優遇？
○5月は9・16・23・30日
夜6時から〜
○内容は、a・作業（討論その他）
b・討論・（自出連合論）、c・運動史年表つくり、D&B
○場所は　大阪アベノ橋から10分
サルートンの部屋
（向い合せは　自連社・向井延）

第二号

東京都目黒区駒場東大教養学部
進学相談室気付　東京伝習館救援会
カンパ一〇〇円以上

救援とは、一方的な物質的精神的援助ではない。伝習館に出会う者は、まずおのれのあり方を問われざるをえない。しかし、その種の一般原則を決意として語るばかりで現実と格闘できないという欠陥ないし空洞（蝕のオーの意味）を生じてはいないだろうか。

また、各人が個別の闘いを掘下げていく場合には、相互のコミュニケーションに努力しないかぎり、連帯して権力を蚕食（蝕のオニの意味）していくことが困難となろう。個別闘争に徹するほど連帯の基盤も拡大するというのは、言うは易く行なうは難い。

会報『蝕』は、この難問に対するわれわれの挑戦である。『蝕』は、われわれ自身の蝕＝空洞をえぐり出し、権力を蝕＝蚕食する運動の媒体たらんとするものである。

▽結成大会報告／甲府自主教研にて／柳川現地近況報告　他。

白衣の監獄を解放するぞ!!

第3集

神戸市長田区平和台町1の13の2　平和台病院労組・共闘委
四五〇円〒70円

平和台病院闘争は一年七ヶ月を越え、私達のささやかな闘争記録集『白衣の監獄を解放するぞ!』は三号を発行することとなりました。思えば70年の七月末、若い労働者たちのつけた小さなが、今や燎原の火の如く燃え上っています。今こそ、多くの闘い・経験・教訓・智恵を結合させていかなくてはなりません。私達の闘争記録集が、多くの仲間にとって、一つの材料を提供することを確信して、労組・共闘委の編集部からの訴えに代えたいと思います。

新しい根拠地と共同体を討論する冬祭り始末記

祭りをやりたくても、すでにできないような精神の持ち主になったのだろうかと自省して淋しくなります。「土着と根拠地と共同体を討論する冬祭り」という長ったらしい名前は、ぼく自身の混乱を表現したものです。討論会での中心的な話し合いも、とらえどころのない共同体を突っつきに突っついたが、どうもスッキリとしなかった。そのため、土着、根拠地などは具体的な討論へと発展しなかった。

ただ、在日朝鮮人と我々のかかわり合いについて、共同体の内包するエゴイスティックな側面が、かなりあからさまになったのではないかと思います。もちろん、それは我々の意識の反映なのですが、このような負の側面を、どのように止揚するのか、ぼくには明確にならないのです。

どこにも飛び出すことのできないぼくたちにとって、根拠地とは、己が現す。ぼくの言う根拠地とは、己が現在生活している何ともハッキリしない場所です。革命の根拠地などというものが最初から存在するのでなく、まず生活の根拠地がある。だが、国家はそれすら許容しない。それ故、生活の根拠地を形成する過程が、結果として革命の根拠地に転化する。

（『NADA通信』七号より）

伝言板＆風の木宮

サバイバルの為の もう一つのレポート

この合宿は、ただプログラムをこなせば良いのか。朝起きても掃除もせずにちらかしっぱなし。日が照ってくると屋根でゴロリ。そんな中でぼくらはワカメやテングサやキノコを取った。タダで取ってきた自然の喰べ物を料理することこそHOW TOではないか。実践のない神秘的悲科学的思想に基く技術を学ぶことではない。

保安処分のティーチイン。俺は公安にマークされてるんだ、とか、保安処分オー号になってみせる、など。浅い現象面だけが語られる。どうやって保安処分を粉砕しようというのだ。粉砕バッヂだけでやるんじゃ…。

夜になって〝客迷〟側が〝官僚〟にデモをかけているうちに、真剣に追求しはじめた。しかし発言は一人だけになり、ハレ学に茶化され〝LOVE PEACE〟でかたづけられる。これこそ身内だけでふざけ合いなれ合うハレ学一派の体質ではないか。そんなわけで次の日までにはほとんど帰っていった。この合宿から何かが生まれていくだろうか。新しいことをやって、世間をアッと言わせるだけでは……。フーテンがボンドを吸っていても権力はおそれない。

（『蘇生』七号より）

備北者キャンプから

今度のキャンプは次から次へと問題が出てきた。今までは、それを直視せずなれあい的に通りすぎてきたと思う。今後ここへキャンパーが来たらどうするかと尋ねられて、ぼくは追い返してしまうと答えた。今までのようなキャンプなら、本当に追い返してしまうだろう。だから、今後キャンプをやるのだったら、一歩でも前向きな内容のものにするために、念入りな準備と丁寧な尻ぬぐいの点までも考えてほしいと思う。

（『速報』より　今井真治）

評書 現代暴力論ノート

向井孝・著

この題名から想起されるものはソレル『暴力論』であるが、それがマルクス神学のためのスクラップ集であるように、この本は軽薄なる無政府収用を論じたものである。著者は、トルストイやガンジーがその全生命を賭して擁立した非暴力、クロポトキンの相互扶助論的な妄想的発想によって身勝手に解釈し、奇妙なるデレクトアクション説と接合せしめることによって、ブルジョワフォルスに対するプロレタリアヴィオランスの勝利を導こうとしている。このような考えは、左翼の閉鎖社会においてのみ通用する。著者はデレクトアクションを人民の生活原理から抽出しているが、それを社会体制の改革手段にまで演繹することは明らかなこじつけである。とはいえ、このような偏奇思想は民主主義の永久的根づけにとっては必要な存在ではある。（『抱朴子』より　近藤秀樹）

土もぐら新信

東大裁判闘争ニュース改題

東京都文京区本郷5の5の8パレス本郷302号　自立社　五〇円

▽下獄対策に向けてノ赤レンガの闘い／保安処分粉砕闘争の強化に向けて／現代の魔女狩り「臨職罪」粉砕／被告人質問抄録／公判日程　他。

自連 Liberal Federation of Japan 4月25日 1972年 第38号 自由連合

自連への発言(2)

内的な闘いを内的に闘え！

宮園 多恵子

70年代に突入したのだ――この事実にどれほど自覚的であったか、自覚的であるのかを自分自身の胃袋で反芻するのがいちばんこれから読むことに抵抗が少ないかもしれぬ。

つまり、自連のはじめの時期は、ひとつは自分ではそう言わなくても旧アナ連以降のひとつの潮流として機能していたし、ひとつには60年代後半の日本の急進主義政治運動の鼓動と協和していた。

この時期は自連は自身の役割に無頓着だったわりにはしっくり行っていた。ノッていたからだ。ところが――70年に達する前によじれたあのラディカリズムの総体とは構造的に異質だったわたしたちはそのことゆえに何かめあたらしいものを打ち出すことができた。それはかぼそくたよりない一本のくもの糸だ。だからほんとうに賭けうるかどうかはこれから決まる。もったいぶるわけじゃないが、〈共同体運動〉のことだ……。

私事ながら、おれも〈共同生活〉をやった。その現実の中で最初にぶつかった壁はほかでもないくらしの中の協同性に関することがらだった。おれたちは〈とにかく実践派〉であるのだな。おそらく、ちびた〈共同生活〉でも、それをやったと意識している連中にとっては向井孝の生活の知恵イロハは、特別な意味あいで迫ってきたはずだ。遺産なのだ、ほんとうだ。勝手な言いぐさまで恐縮なのだが、このことだけにおさえておけばまだまだ自連は〈自連〉であったかもしれぬ。なのに60年代の潮流の中にいたということの時間的な連続性を、運動の質の連続性とみまがう編集姿勢としてあらわしたために、連合赤軍の事件に一喜一憂してしまう体質をときおり、かいまみせてしまう結果を招いた。ラディカリストたちがよれてしまったのでその周辺にいた若い人びとが溺れそうになってつかまえようとしたワラこそ自連にほかならなかったということだ。自連がこれらの人びとに、そこでならなくなった。これは意外と無残だな。

だからだから、ためらわず自連の分解だ。もはや結合にかまけるに及ばない。〈個的な闘いを個的に闘え！〉だ、ごめんなさい。信じたまえなどとは言わぬ、やるべきことをやるがいいのだ、やりたいようにやるがよい。そしてできれば、現場から、互いに実況中継しようではありませんか。やってきたのだもの、これからだってできる。

部分であること、だから連合しなくては生きづかないこと、このことをわたしたちはほかならぬ自連で確認できたはずだ。これをあなたは数少ない自連の成果のひとつだとは考えませんか？

向井孝は、発行部数の増大は虚数である、それは内容の充実を全く意味しない、と言っているがそのとおりだ。そして彼は続ける、この自連を媒介として、知り合ったわずかの人たちの互いの深いコミュニケイションこそ新しい意味ある力の芽である、と。またまたそのとおり。ぼんやりしたその気はもうどこにも通用しないと知るべきだ。脱出気では何もやれぬ。たたかれて痛むは己が身ではないか。

出発点は明らかだ。古い闘いとそのスタイルは忘却すべきなのだ。今、遅れて綜活することの意味を知ったとき、自連はすでにはじまりを予見し、胎動を確かに感じているはずである。また会おう。

沈め！ 苦く、からい水に頭までつかれ！ とっきはなせなかったために、今、自連は遅れて沈まなくては

なるだろうと思います。要は問題をぼかさず鮮明にすることではないでしょうか。ある意味では、これからの自連にこれまで以上の強い関心を抱いている次第です。

（東京 北 邦彦）

■何やかやいっても自連の廃止はおめでたいことだと思う。これで本当にやめられれば、編集社員の皆さんをより一層評価してしすぎることはあるまい。もし40号が廃刊号なら、全頁白紙とか全面黒とか赤刷とか、全社員名簿をのせるとか、何らかのオモシロイものにと期待する。それが1号からのまとめとされればなおよい。68年からのあの時代が終り、ファショ化の時代に廃刊、これから個々の長いたたかい（けんせつ）が始まるんですね！

（奈良 ばん ただし）

■絶対に自連をやめることはしないでほしい。ぼくもミニコミを出しているので強力な援助はできないけど、できるかぎりのことはするつもりです。

（東京 K・S）

■40号で廃刊になるようなことが書いてありますが、一応12月分まで送金します。

（埼玉） H・F）

自連への発言(3)

アンケ・短信より抄出

■自連廃刊の提案、特に発行エネルギーが無くなってきた（編集社員の共同作業もうまくいっていない）という指摘、外からも漠然とですがわかる気がします。でも実際につぶすのは、言われるように案外難しいと思います。目に視えるものにしか頼れない者が必ず出てくると思えますし……。いずれにしても、自連内部の姿をはっきりとらえうるまで十分に討論がされるなら、廃刊にするかどうかは、たぶんさして重要でなく

【3頁より】 文革は、結局は「革命」だったんでしょうか。

玉川 文革は事実上内乱だったのではないかと思います。毛沢東が、「一〇万とはいわないが、それに近い数の人間が死んだ」と語ったそうですが、こうなると革命と反革命の戦いであるとは一概に言えないでしょう。66年から68年の三年間、銃・大砲の奪い合いを含む毛派同士の内ゲバがあり、それを弾圧するのに自分たちが育てた極左分子まで粛清してしまった。連合が成立った今から考えてみれば「何故あんなに争ったのかわからない」というのが彼らの正直な気持ではないだろうか。毛沢東はある外人記者に「自分は中道左派である」と語ったそうです。極左分子の成長を警戒するのは当然でしょうね。

文革中に、しばしば「無政府主義」を批判するスローガンが見られた。しかし人民公社はクロポトキンの発想によく似ているし、中国の革命は、常に農民一揆的なものに端緒があった。それを無理矢理マルクス主義理論で指導しようとして多くの矛盾を生み出した。中国的マルクス主義は常にアナーキーな性格を一面に多んでいた。自分が中国革命を評価してきたのは、このアナキズム的性格であるが、結局マルクス主義に回帰していく。――玉川。